

## メッセージアウトライン 民数記11:1~35 「不信の民」

イスラエルの民はシナイ山でモーセを通して主なる神から十戒をはじめとする律法を与えられ、幕屋(移動式神殿)とその備品の詳細な作り方、いけにえのさきげ方などの様々な儀式、移動する各部族の配置等を教えられ、その後、シナイ山を出て三日の道のりを進んだ。→民10:33

イスラエルの民はただまっすぐに神を信じて、そのみことばに従えば祝福が約束されるすばらしい状態で出発したにもかかわらず、またも問題を起こした。

[1]「さて、民は主に対して、繰り返し激しく不平を言った。主はこれを聞いて怒りを燃やし、主の火が彼らに向かって燃え上がり、宿営の端をなめ尽くした」

どのような不平を言ったかと言えば、彼らは荒野の旅に対する困難、変化もなく乏しい食事や生活などの一般的な不平や不満であった。これは日々、超自然的に天からの食物マナで養われていることの恵みや約束のカナンの地に主が導いてくださるということをよく考えず、感謝もせず、目の前のことだけに目を留めた時に起こってくることである。

神に従ってきたのに、いつまでこんな荒野の旅を続けなければならないのか……。このような不平不満、つぶやきは伝播力が強く、あっという間に民の間に広がっていった。

このような感謝のないイスラエルの民の忘恩の態度に主は怒られ、主の火が彼らに向かって燃え上がり、その宿営の端をなめ尽くしたのであった。これは実際の火である。

[2] 民はこれが主からのさばきの火であることを知り、このままでは自分たち全部が焼かれてしまうと思い、モーセに向かってわめき叫んだ。すなわち助けを求めたのである。ここに至るまで、モーセは事件が起こるたびに主にとりなしの祈りをしているが、彼のとりなしがなかったならば、イスラエルの民はとっくの昔に滅ぼされていたであろう。

[3]「その場所の名はタブエラと呼ばれた。主の火が、彼らに向かって燃え上がったからである」

「タブエラ」…「燃える(バアル)」の派生語。この場所はシナイ山から北東に20kmほど行った地と思われる。

[4-6]「彼らのうちに混じって来ていた者たちは激しい欲望にかられ、イスラエルの子らは再び大声で泣いて、言った。『ああ、肉が食べたい。エジプトで、ただで魚を食べていたことを思い出す。きゅうりも、すいか、にら、玉ねぎ、にんにくも、だが今や、私たちの喉はからからだ。全く何もなく、ただ、このマナを見るだけだ。』」

「混じって来ていた者たち」…エジプトを脱出する時、入り混じって来た多くの外国人たち。

→出12:38 この外国人たちがまず、毎日のマナの食事に飽き、激しい欲望にかられて不平を言い、それがイスラエル人たちにもたちまち伝播して民全体が泣き叫ぶというぶざまな姿をさらしたのである。彼らはエジプトで食べていた数々の食物のことを思い、エジプトでの生活を恋しがった。

そのエジプトで彼らはどんな扱いをされていたのか。その厳しさ、苦しさ、悲惨さのゆえに彼らは主に向かって助けを願い求め、それゆえに主はモーセを指導者として立てられ、彼らをエジプトから救い出されたのであったが、今、彼らはそのようなことなど少しも思わず、主に対して泣きわめいたのである。さらに彼らは「……ただ、このマナを見るだけだ」と不平を言うが、このマナも彼らのために天から超自然的に与えられた食物であることを思わず、主の配慮をあなどっている。これは恐るべき忘恩の姿である。

[7-9] 「コエンドロ」…水辺に生じるセリ科の植物。実は白色球状で芳香がある。  
→コリアンダー

「ベドラハ」…アラビアなどに産する植物から採れる薄黄色のゴム状物質のことと思われる。

彼らはこのマナをいろいろな方法で調理して食べていた。夜、宿営に露が降りるとき、マナもそれと一緒に降った。これは栄養的には十分であったようである。イスラエルの民は荒野を旅する間、ずっとこれを食べていた。

[10]「モーセは、民がその家族ごとに、それぞれ自分の天幕の入口で泣くのを聞いた。主の怒りは激しく燃え上がった。このことは、モーセにとって辛いことであった」

ここまで民の先頭に立って歩んできたのに、民の不平不満を聞き、それに対する激しい主の怒りが下されるという現状はモーセにとってまったく辛いことであった。この主の怒りは、今度は燃える火ではなく、別の形で民に降りかかることになる。

[11]「それで、モーセは主に言った。『なぜ、あなたはこのしもべを苦しめられるのですか。なぜ、私はあなたのご好意を受けられないのですか。なぜ、この民全体の重荷を私に負わされるのですか。』」

モーセは主が自分を苦しめている、主のご好意を受けられない、主が民全体の重荷を自分に負わせていると感じている。彼はかなり悲観的、感情的になっていることが分かる。

[12]「私がこのすべての民をはらんだのでしょうか。私が彼らを産んだのでしょうか。それなのになぜ、あなたは私に、『乳母が乳飲み子を抱きかかえるように、彼らをあなたの胸に抱き、わたしが彼らの父祖たちに誓った地に連れて行け』と言われるのですか。」

「乳母が…」の文は出33:1等からの自由な引用か、または主からモーセに語られ

た聖書に記録されていないことばと思われる。

彼はここで主にイスラエルの指導者として立てられていることをあたかも不当であるかのように訴えている。

[13-15]「どこから私は肉を得て、この民全体に与えられるでしょうか。彼らは私に泣き叫び、『肉を与えて食べさせてくれ』と言うのです。私一人で、この民全体を負うことはできません。私には重すぎます。私をこのように扱われるのなら、お願いします。どうか私を殺してください。これ以上、私を悲惨な目にあわせないでください。」

モーセは自分のできることと、民の莫大な必要とを比べて絶望している。彼は重荷を全部自分一人でかぶっている。イスラエルの民は数々の主の力ある奇跡を経験して来ておりながら、「のど元過ぎれば熱さ忘れる」のことばのように感謝もせず、目の前の現実的な必要のみ繰り返し訴えている。モーセもこのような状況で、感情的、悲観的になり、主に怒りをぶつけている。そしてついに自分の死をまで願うのであった。

誰でもモーセの立場に立つならば、このようなことばを口にしてもおかしくないかもしれない。神に従い、いのちをかけて、一生懸命民を導いてきたのに、このようなさらなる要求と反抗のことばをあ

びせられて、失望しない人などいないであろう。

[16-17] しかし、主は恵み深いお方であった。主はモーセの感情的、悲観的な願いに答えて彼のいのちを取るといふようなことはなさらず、代わりに、まず第一にモーセの負っている重荷を他の者たちにも負わせようとされる。主はモーセにイスラエルの民の長老七十人を集め、彼らを会見の天幕に連れて来て、モーセのそばに立たせること、そこで主はモーセの上にある霊から一部を取って彼らの上に置き、民の重荷をモーセと共に負わせることを告げられた。これは彼らもモーセの権威と能力にあずかる者となってモーセを助ける務めをする者となることである。

[18-20] 第二に、民の不信仰な泣き叫び、不平不満に対する応答として、主は民に肉を与えることを告げられる。しかもそれは一日や二日や五日や十日や二十日ではなく一か月もであり、ついにはそれが鼻から出て来て吐き気をもよおすほどになると言われる。しかし、これには厳しいさばきがともなうということが後でわかる。

[21-22]「しかしモーセは言った、『私と一緒にいる民は、徒歩の男子だけで六十万人数です。しかもあなたは、彼らに肉を与え。一か月の間食べさせる、と言われます。彼らのために羊の群れ、牛の群れが屠られても、それは彼らに十分でしょうか。彼らのために海の魚が全部集められても、彼らに十分でしょうか。』」

イスラエルの民はこの時、老若男女を合わせて約二百万人はいたであろう。それでモーセは羊や牛の群れ、海の魚が全部集められ、食用にしても彼らに十分食べさせることができるのでしょうかと主に尋ねるのである。

[23] それに対する主の答えは「この主の手が短いというのか。わたしのことばが実

現するかどうかは、今に分かる」と言われた。主なる神は人間とは違い。全知全能のお方であることをモーセ自身もまだまだ学ばなければならなかった。

[24-25]「モーセは出て行って、主のことばを民に語った。そして民の長老たちのうちから七十人を集め、彼らを天幕の周りに立たせた。すると主は雲の中にあって降りて来て、モーセと語り、彼の上にある霊から一部を取って、その七十人の長老に与えられた。その霊が彼らの上にとどまると、彼らは預言した。しかし、重ねてそれをするとはなかった」

この霊は物質的なものではなく、モーセに与えられていた権威と能力の源としての霊である。これはたとえて言えば、炎のようなもので、他に点火しても最初の炎が減少しないのと似ているところがあるだろう。この霊を与えられて七十人の長老たちはモーセを助けるのである。この霊が与えられた時、彼らは預言した。これは主から与えられたことばを語ったり、賛美するようになったことであつたと思われる。しかし、「重ねてそれをするとはなかった」とあるので、これはモーセの上にある霊が分け与えられたということの目に見えるしるしとしての一回限りの出来事であつた。→使徒2章のペンテコステの聖霊降臨の出来事と同様。

[26] この時、エルダデとメダデという二人の長老は何かの理由でモーセのもとに行かず、宿営の中に残っていたが、彼らの上にも霊がとどまり、宿営の中で預言した。彼らも七十人の長老のうちに数えられていた者であつたと思われる。

[27-28]「それで、一人の若者が走って来て、モーセに告げた。『エルダデとメダデが宿営の中で預言しています。』若いときからモーセの従者であつたヌンの子ヨシュアは答えて言った。『わが主、モーセよ。彼らをやめさせてください。』」

たぶんヨシュアは彼らが将来モーセに反逆するようになるのではないかと恐れてこのように言ったのであろう。

[29] ヨシュアのこのことばに対して、モーセは「あなたは私のためを思って、ねたみを起こしているのか。主の民がみな、預言者となり、主が彼らの上にご自分の霊を与えられると良いのに」と答えている。モーセは自分の名誉ではなく、神の栄光のために、神の御霊の働きがイスラエルの中に現れたことを喜び、すべての民がこの恵みに預かり、皆が神のみことばを語る預言者となればよいのにと望んでいることが分かる。自分の保身やねたみや嫉妬などは少しも見られない。神のしもべとして立派な心がけである。

[30] そしてモーセとイスラエルの長老たちは、宿営に戻った。

[31-32] さて民が泣いて願った肉の問題はどうなったのか。

「さて、主のもとから風が吹き、海からうずらを運んで来て、宿営の近くに落とす。それは宿営の周り、どちらの側にも約一日の道のりの範囲で、地面から約二キュビトの高さになった。民は、その日は終日終夜、次の日も終日出て行ってうずらを集めた。集めたのが最も少なかった者でも、十ホメルほど集めた。彼らはそれらを自

分たちのために、宿営の周囲に広げておいた」

民は同じような出来事をすでに体験していた。→出16:11～13 主は海の向こうからうずらの大群を飛んでこさせ、イスラエルの宿営の周りのどちらの側にもそれぞれ一日の道のりの範囲で落とされたのである。うずらはキジ科の鳥で鶏よりも小さく、その肉は美味である。このうずらは三月ごろ南からパレスチナ地方に渡って来て、九月末にはまたさらに大きな群れとなって南へ帰っていく。主はこれを用いられたのであろう。しかし、出16章の出来事よりもはるかに大きなスケールである。この時、どれほど多くのうずらが地上に落ちたかが分かる。それは地面から約二キュビトの高さであった。一キュビトは約四十四センチメートルであるので、八十八センチメートルもの高さでうずらが地上に積もったわけである。これだけの大量のうずらがイスラエル人の宿営の周りに落ちて来たのである。民はその日も、翌日も終日終夜うずらを集め、最も少なく集めた者でも十ホメルほど集めた。一ホメルは二百三十リットルであるので、十ホメルは二千三百リットル。二百リットルのドラム缶に入れて十一本分以上の量である。彼らはそれを宿営の周囲に広げて干し肉として食べたのであろう。

モーセは民の不平不満のために大いに思い煩ったが、主のことばはこのようにして実現したのである。しかし、民は感謝したのであろうか。

[33]「肉が彼らの歯の間にあって、まだかみ終わらないうちに、主の怒りが民に向かって燃え上がり、主は非常に激しい疫病で民を打たれた」

これは彼らが最初の日にうずらを食べ始めた時ではなく、19～20節のことばや詩篇78:29～30節のことばから見て、「彼らがまだ肉を食べ尽くさないうちに」という意味であると思われる。そしてこの時に主の怒りが彼らの繰り返しの激しい不平、不満、不信仰に対して燃え上がり、非常に激しい疫病で彼らを打たれたのである。これはペストやコレラなどの伝染病であったのではないだろうか。しかし、詳しいことは不明。

主は彼らの欲望に答えられはしたが、同時にその不信仰をさばかれたのである。

[34] 生き残った民は死んだ者たちをその地に葬った。その場所の名は「キプロテ・ハ・タアワ」と呼ばれた。それは「欲望の墓」という意味である。

[35]「キプロテ・ハ・タアワから、民はハツェロテに進んで行った。そしてハツェロテにとどまった」

11:3の「タブエラ」はキプロテ・ハ・タアワの一部であると思われる。「ハツェロテ」はキプロテ・ハ・タアワからさらに北東に上った地点と思われる。詳しい場所不明。

神の恵みを受けてきたイスラエルの民の恐ろしいばかりの忘恩と不信仰、指導者モーセの苦しみ。モーセは人間的に限界を覚え、感情的、悲観的になっていた。しかし、そのような彼の祈り、訴えを主は聞いて答えてくださった。主のあわれみと恵みは測り知れないことを改めて教えられる。しかし、主はまた義なるお方、聖なる

お方である。今まで受けた恵みを忘れ、不信仰になり、不平不満を繰り返す民の罪と悪をそのまま見過ごすようなお方ではない。必ず、それにふさわしいさばきも与えられるお方である。

私たちもモーセのようにさまざまな苦しみや困難に直面する時、それをそのまま主なる神のもとへ持って行って、苦しみの中でも、涙を流しても、叫ぶようにしてでも、困難の解決を熱心に祈り求め

、答えをいただく者になりたい。ことばを飾ったり、当たりさわりのない言い回しをする必要はない。心にある苦しみ、悲しみ、願いをそのまま主に打ち明ける。その時、主はそのような祈りでも叱責することなく受け入れ、恵みをもって驚くべき仕方で答えてくださるのである。たとえ、すぐに答えられなくても私たちは不信仰になることなく、主が備えてくださる時を忍耐をもって待ち望むことが大切である。

神はそのひとり子イエス・キリストをお与えになったほどに、私たちを愛していてくださる。このようなお方が私たち信仰者に最善をなしてくださらないことがあるだろうか。

私たちもモーセのように大胆に主の恵みの御座に近づこう。→ヨハネ3:16, ヘブル4:14~16